ソウダガツオ

雄国 五郎

石垣がめがねの男を伴って訪れてきた。
ドアホンが鳴って、キッチンの高壁にある時計を見ると、一一時四〇分だった。風見はトイレに起きて、冷蔵庫を開けるためにキッチンへ来たのである。ドアホンの画面に映った姿は、外の明るさの逆光になって、顔や姿が見えにくい。音声も割れて響くだけだった、だが、一人でないらしいことが、風見の警戒心を緩和した。玄関内の電灯をつけて「はい」といい、重い引き戸を開けた。明かりを浴びた顔は白い半袖シャツの石垣だった。その肩口にめがねの野呂が赤い顔に歯並びの悪い口元を崩して、石垣の背を押して入るように促している。あれっ、これはいつのことだろうかと、風見の頭上をいびつな影が覆った。二人を招じ入れると、リビングの電灯を点け、座席を勧めた。三角形に腰掛けると、昼間と同じ気分になって白いカーテンの窓へ目をやった。もちろん、シャッターが閉まっているし、外が透けて見えない。
石垣が大げさにたばこの煙の輪を描いていた。お茶の準備をと思って風見は立ち上った。
「石垣は飲んでいないんだよね。これから帰るってわけにもいかないよ。ビールにするか。ワインもあるけれどね。ウイスキーみたいに氷を入れて」
風見宏は一人で決め込んで、冷蔵庫内からハムとチーズを取り出して、三つの小皿に盛り、楊子をつけた。
「矢代さんはいなくなっちゃったのか」
野呂の場違いのような声が響いてきた。
「おお、福島へ行っちゃったよ。また、一人暮らしになって気楽なものだ」
そうリビングへ向かってこたえたものの、野呂誠司がどうして矢代達代のことを知っているのかと、いぶかしく思った。野呂が亡くなってからもう三年は経つと思うが、そのとき矢代がいたかどうか。もちろん三十九歳で事故死した石垣は矢代を知るはずがない。だから、リビングへ戻った風見は、矢代が福島へ帰った事情などを話すことはないと思った。
「小学校の先生だったそうで、胸の張ったこぎれいなおばあちゃんだったよなあ」
野呂はこの場に矢代がいるみたいな目をして、石垣

に説明しはじめたが、
「今度の会談では、ペナースがドラベンに完勝だよな。風見もそう思うよな」
野呂の話を遮るように、石垣が声高に言った。
「俺はドラベンがペナースを骨抜きにする柔軟戦術で勝ちだと言ったんだ。初ちゃんも俺に肩を持った」
野呂が両腕で卓上に輪を描き、半ば顔を埋め込み、寝そべっている。国道二五五沿いの「初子」の店で、議論しながら飲んできたらしい。二人の行きつけの店で、風見もつきあったことがある。
風見が台所からカウンター越しに、
「ドラベンはペナースに完全な非核化を約束させたのだから満足しているよ。もっと強行に対抗してくるかと用心していたんだろう」
言葉を投げた。
「自分のいるスゴールまで届く弾道ミサイルにおびえたか」
石垣は目の前で、小型の器械を小気味よく操作したように、卓上に指の長い手を伸ばして、ビールのコップを取り上げた。
「再会を祝して」と口にしたが、後の言葉を省略して、風見は冷えた麦茶を飲み込んだ。他の二人も声を発しなかった。風見は奇妙な気がしていた。生き残っているのは自分だけである。楕円形に切り込まれた天井についている電灯も変わりない。夢の中の出来事には違いないのだけれど、石垣の白っぽい細面も、野呂の野いちごを塗りたくったような顔も、生々しいのだ。一番老けているはずの自分の顔は、思い浮かばない。
「そうかもしれない。これまでペナースは正体不明で来たから、ともかく会ってみようという気持ちがつよかったと思うな。俺なんかペナースのあのひげ面なんか全く知らなかった。若えのに、ひげを白くしてさ。あれ、染めているのか」
野呂が荒くそり残してある顎髭をつまんで言った。
「そうだろうな。まだ三十三歳とかいうぞ。三代目の委員長だからな。世襲ってえのは、あの国にとって封建的すぎるよ。やることは急進的でテロ組織の親分みたいに、自分の身内であれ、自分の仲間まであれ、かまわず処罰するけれどね」
石垣は何でそういう知識を得ているのだろう。彼の現役時代には、パソコンすら普及していなかったはずだ。しかも、時代錯誤？夢は醒めてはいけない。
「それにしても、たぶん、ご満悦で会談から帰ってきたね」
風見は、その翌日の朝、カラー写真の新聞をコンビニで買ってきた。まだ、どこかに保存してあるだろう。
「核を捨てるのはいつになるのかな」
「それだよね。一番肝心なのは。野呂は核心をつくね

え」
　そういう野呂は、石垣のコップへビール瓶を傾けながら、わずかな残りを自分に注いだ。
　野呂は大分飲んできただろうに、まだ飲むのか。この頃は昼も夜も飲むのよ、止めても聞かないの。彼の家を訪れたとき、奥さんの史乃さんが伏し目がちに言い、娘の弓子さんへ目配せした。熱海の病院から伊勢原の病院へ移った頃のことだ。風見は体調がよくないのかと案じたのを思い出す。しかし、彼の病状を詳しく聞くことをしなかった。俺は、小学校二年の時、胃腸を壊して六十日も休んだ。「宏はダメか」と親もあきらめたと後から聞いたけれどね。小柄で運動が苦手な風見は、二人へそう話して「二人より先に死ぬから」と。宣言していた。
　背が高く、細身にみえて胸板が厚い石垣や、会社の仲間とゴルフを楽しんでいるという野呂は、高校時代から運動に優れ、卓球の選手で、肩幅の広い健康そうな体躯をしていた。
「段階的に非核化、ということはすぐにはやらないってことだろう。どんな機会にやるか。新しい条件が何かしら出てこないとね」
　風見は氷の音をさせて麦茶を口にした。
「風見はビールをやめたんだって。医者から止められたんだってな。新しい条件というのは、なんだと思う？俺は最近ビールじゃきかなくって、焼酎を飲んでるよ」
「バカ、焼酎はやめろ。肝臓をやられるぞ」
「俺は手遅れだ、もうやられている」
　野呂の反発は、やけ気味で、凄みさえ帯びている。石垣はそれに応じずに、
「核保有国は主要五カ国のほか、インド・パキスタン・イスラエル、それにペナースが加わったわけだ。それらの国が足並みをそろえて核破棄ができるかどうかだろう」
「待って、二三日前にネットから印刷した資料がある。出典はよくわからない。参考程度だよ。持ってくる」
　風見が立ち上がった。

国名	核弾頭数	製造年
ドラベン	４０００	１９４５
ロシア	４３００	１９４９
イギリス	１８５	１９５２
フランス	３００	１９６０
中国	１８０	１９６４
インド	６０	１９７４
パキスタン	６０	１９９８
ペナース	１０以下	２００６
イスラエル？	８０？	１９７９？

「無理だよね。遅れて来たには違いないけれど、せっかく大国に肩を並べたのに、おまえの国だけ核を捨てろと言ったって。せっかくの宝物を手放すはずはなかろう。新しい条件はさしあたって南北の統一だろう。ドイツもベトナムも一緒になって、引き裂かれているのはペーナン半島だけだからね」

あれっと、風見は石垣のはげ上がった額をみた。ドイツの再統一もベトナムの統一も彼の生前であったろうか、と引っかかったのである。石垣が関心を寄せたのは、フランスに変わってドカベンが南ベトナムへ荷担してきたことである。

「ペーナン半島と同じじゃないか。ドカベンはどこへでも手をだすんだな」

石垣は細い鼻梁に目を寄せ、嫌悪感をあらわにした。

「金持ちだから、どこの国でも助けてやるんだろう」

野呂は、背もたれへ身体を預けているものの、いかに大儀そうである。寝室のベッドは二つだ。マットレスなど寝具は納戸にあるが、寝室にもう一つ寝どころを準備するのは無理で、隣の書斎かこのリビングへ用意するしかない。風見は決断しなければならなかった。客である二人に寝室のベッドを与えるのが順当だが、今の情勢では、野呂を寝かせることが緊急である。病んでいるとはいえ、野呂とはいつでも会える気がするのはなぜか、風見は意識の混濁にこだわらなかった。

風見は手早く寝室と隣り合わせの書斎の長細い空間へ寝具を運び、自分用に寝どころを作った。そして、野呂をベッドへ抱え込んだ。

「俺はいつも畳の上だから、落ちないかなあ」

シャツとズボンを脱いだ姿で、野呂が立ちすくんだ。野呂の下半身は思いの外に肉が落ちていて、酔いも醒め、生真面目そうに目を伏せた。じゃあ、こっちにするかと、狭い出入り口から、野呂に書斎を覗かせた。

「おお、これはいい、落ちる心配がない」

暗い廊下へ出ると、風見は（なぜ死んだのだろう、昼間からビールや焼酎を飲んでいたせいで、肝臓病になったのだろうか。同級生の中で早く死んだ神子と同じ肝硬変ではなかったか。神子は酒をあおると顔が青ざめ、喧嘩好きだったが、野呂は腕まで赤く染めて多弁になるだけだった。石垣と三人で行きつけの宿に泊まると、石垣がやたらに酒の追加を注文した。徳利の酒を空き容器にこぼしたりしていた。宿の敷地内に住む女将の娘の照代が手伝いに来ていて、照代を座敷へ呼ぶためであった。野呂と石垣は、白いうなじに整った山型髪の目立つ照代へ視線を送っていたのだ。

石垣との対面は夢の中ではあったが、全く久しぶりの懇談で、もっと話したかった。しかも、話題が風見にとって最近の最大関心事であった。ドカベン一辺倒に等しい世界の風潮の中で、ドカベン批判を口にした

ら、左翼思想の持ち主として会話を中断されかねないだろう。ドカベンの大統領は、前大統領が主張した人権重視・核廃絶の方向性を無視し、自国の保護主義を喧伝して当選しただけに、当然、全世界からそれへの批判を浴びたが、強硬姿勢を崩すわけにいかなかった。しかし、核廃絶運動のあおりをくったり、関税のひきあげで貿易不均衡に陥ったりして、自国が孤立しかねない情勢となっていた。そのため、軟化し始めたのではないかと見られていた。それが、ペナースとの交渉にも現れたのだろう。オレンジ信用金庫の東浜支店長である石垣は、個室で各紙を読むのが朝の日課だといっていただけに、どんな見解を持っているか、風見には興味深かったのである。未消化のまま身体にためているものをさらけ出せる，滅多にない機会にちがいなかった。

野呂との談合では、そういう話題を持ち出しても、接ぎ穂がなく、彼は社内の愚痴めいた話に変えてしまうのであった。彼は、P電器会社の営業業務を長くしていたが、上役と衝突し、退社した。そして、同社の管理を担当する子会社へ入社した。本社は都内にあったが、彼の自宅からほど近い丘陵にそびえ立つガラス張りのビルは、西湘地区のどこからでも眺められた。事実上のP社の本社であった。大型の店舗が並ぶ国道から丘陵へ入ると、専用道路の両脇は手入れの行き届いた花壇や植栽がしばらく続き、建物は洋式庭園に囲まれていた。そこには屋根付きベンチが並び、売店風の彩りの建物もあった。

「このビルには、電算機ばかり使っている女子社員が二千人も閉じ込められているから、一日三回は外の空気を吸って身体を休められるようにしているんだそうだ。お前の教え子の佐久間花枝も十七階の電算室にいるよ。二百人の大世帯の課長さんだ。女性課長は二人だけ」

地元の町に新設の県立高校ができ、風見は他校から赴任して、第一期生の佐久間たちの学級担任となった。佐久間花枝は、皮膚の薄い顔肌で、目尻が上がり気味なのが、意志の強さを表している女生徒だった。作文を褒めたためか、新聞委員になって、編集長になった。印刷のために風見は佐久間らを横浜の新聞社や、沼津の印刷所へ引率した。横浜は乗り換えが多く、喧噪な街頭を歩いたが、御殿場線はローカル色豊かで、千本松原に近い印刷所へ行くのは小さな旅であった。

「佐久間の家は古いおもちゃ屋でね、彼女の祖父と俺の家と関係があるんだ。親戚でね。今でも年末には米とミカンを届けているよ。行くと、ばあさんが魚をくれるんだよ。自分ちで干物を作っているんだね。生の魚は、帰ってきて俺がさばく」

野呂がそう言った。風見は入社後の佐久間と会うこ

とがなくなったものの、未婚のままキャリアウーマンでいるという彼女への関心は薄れなかった。
「ところで、ペナースは非核化どころか、高炉の増設をしているって、今日のネットニュースで観たよ」
「そうか、まさか、増設はしないかと思うけれど、廃炉を急がないかもしれない。ドラベンがまた関税引き上げで問題を起こしているからね。ことに中国との関係がよくない。ペナースはこのところ、中国とロシアとも首脳会談をしているから、ドラベンは苛立っている」
「保護主義の復活か。中国は仕返しをすると言っている。中国だけじゃすまないだろう。日本もあおりをくう」
「保護主義というのは、自由貿易の反対で、相互主義・公正貿易のこと。自己防衛の屋台骨ということだ。核保有も自国はするが、他国は持つな。傘下に入れ、というわけだ。それが真相だろうな」
「去年ＮＰＴ（核兵器不拡散条約）の批准が行われたね。日本は反対だった。核保有国はそのままで、これから核兵器を持つのはダメという可能性があるということで。全世界で核廃棄をしなければ無意味だろう」
「それが出来るのはいつのことか。核兵器を使う戦争でも起きてみないと」
「核の傘下っていうじゃないか。韓国・日本・アジアの国々、みんなそうしているじゃないか。この国なんか、世界で唯一ドラベンに悲惨な体験を強いられた。それでもまだ子犬みたいにしっぽを振ってくっついている。あきれたバカだ」
「野呂の娘の喜代ちゃんはハワイで知り合った男とよくなって、もめているよ。野呂はハワイで向こうの親とも会ったそうだ。男がこっちへ来るならいいって。結局、二人の仲も冷えちゃったらしい。俺は十五回三十三カ国海外旅行をしたけれど、ドラベンへは全く行く気がしない。景色は見るところがあるかもしれないが、歴史遺跡がないし、憎むべき国だからな。女性には、ドラベン礼賛の人が多いけれどね。銃社会で怖いしね。何とかドラベンとの安保を破棄して、出て行ってもらう方法はないのかな」
「ソ連が来たら、北海道が沖縄みたいにされていただろう…」
「どっちがよかったかどうか」
「いや、中国が遣唐使の経路を逆にやってきていたらどうなったか。中国だったら、太古から関係が深い、人種的にも変わりがなく、一番よかったじゃないか」
「しかし、日本の植民地化された恨みもあって、どうだったか。南京大虐殺の真相もわからないしね」
「俺は、中国へは三回旅行したけれど、一番親しみが持てたね。景色も緑が濃くってね。敦煌では岩だらけ

の砂漠だったけれど。食べ物も中華料理でなれているから安心。漢字の国だから、店の看板もわかって、筆談らしきこともできる」
興奮した言い方で風見は主張した。
石垣がテーブルに長い指の掌を広げて親指を内側へ織り込み、他の四本の指で叩いた。
「しょうがねえだろう。戦争に負けて、原爆でさんざんな目に遭っても、しっぽを振ってついて行くんだから」
石垣は口をすぼめ、笑みさえ浮かべて、傍観者ぶった。
「原爆や水爆じゃ、数の多い少ないは、問題じゃないよな。いつ、どんな風に使うかだからな」
「ペナースにすれば、北と南がいっしょになり、元の半島になればと考えているんだよ。
「そりゃあ、南だって同じ思いだ。ドラベンが引き上げてくれたらって思っている。この国だってそうだろう。しかし、そううまくいくか」
「沖縄を解放しないといけないね。戦争でひどい目に遭ったあと、返還が遅れて、さらに基地ばかり残された。三重苦だよ。お金をもらって、道路や施設はよくなっただろうけれど、軍用機が落ちたりして、身の危険がいつでもつきまとっている。沖縄の人にとっては、戦争はまだ終わっていない気持ちだろうよ」
石垣には、懐疑主義的な面があって、苛立たせる。
風見がリビングに戻ると、石垣が白い花の写真を表紙にした冊子を卓上にページを広げていた。コップが粟粒だけになり、瓶の中身が空いていた。
風見はそれを手に、
「新しいのを出したんだね。もう、七月号か。今夜は蒸し暑いな。氷を少し入れようか、味が変わっちゃうかな」
「おう、頼むよ。ウイスキーのオンザロックみたいに」
珍しく屈託のない石垣の笑顔だった。
「よく撮れているなあ。本店の橋上さんがやっているのか」
「本所に広報室が出来て、彼女が室長になった。格は課長並みで、俺より上だ。でも、割り付けの相談によく来るよ」
石垣が橋上佐代と知り合ったのは、労組結成の折だった。二人とも労組幹部となり、管理職に抜擢されたのだ。
当時、石垣の機を見るに敏な特徴に、風見は首肯したが、公私ともにうまくいきすぎる経緯が、気になった。石垣には大恋愛で結婚した妻がいた。
石垣の関心は、もっぱら橋上佐代にあるらしく、風見は同調してやるしかなかった。

「帰りは、いっしょに晩飯食べて真鶴まで送って行くんだろう」
夏の初めに石垣に誘われて、釣りに行ったことがある。夜明け方に釣り船に乗るために、その前日、積み木のような船着き場に近い船宿に泊まった。その夜は、橋上佐代とその友人が浴衣姿でやって来て、派手な飲食をした。
翌朝乗合船で釣りに出た。ソウダガツオがよくかかり、その引きの強さと跳ね回る勢いを堪能した。光る色もかたちもよかった。アジならいいが、食う気にもならない、と石垣は言って、風見の容器に放り込んだ。
昼にならないうちに帰途についたが、
「彼女に会わなくていいのか、どこの家だ。近いのだろう」
と、風見が気遣った。だが、彼は不興げに黙り込み、
「午後の市政報告会に誘われたが、断った。彼女はソウダガツオだよ」
吐き出すように言った。保守系市長の会合のことらしかった。少し荒々しい運転で、街中の急坂を登った。真鶴の駅で降ろしてくれ、電車の方が早いかもしれないというと、素直に頷いた。風見は帰りを急ぐためではなかった。閑散な駅構内に入って、開放感に充たされると、石垣の不興の原因が、昨夜の橋上との意思のギャップにあったのではないかと想到した。堅固な二人の構築物に思いがけない傷みが見つかったのだ。それは、表面の修復ではすまない、土台や骨組みに関与することかもしれなかった。近いうちに聞く機会を持ちたいと思った。彼にとって、抜き差しのならない課題にちがいなく、緊急を要すると、風見は確信した。
石垣の交通事故死はそれから一週間後に起こった。
風見は冷蔵庫の扉を開けたまま、何か一口食べたいと探したが、空きが広く、目につく物がなかった。透明の袋に入ったレタスは丸ごとで、取り出す気にならない。隣にラップに包んだキュウリがあった。昨日庭先から取ってきて半分食べた初物だった。それを口にくわえたままトイレへ向かった。キッチンへ来る前に行ったのに、また尿意を催していた。少ししか出ないのに、最近の癖である。脱衣場で振り向き、キッチンの明かりが消えるのを確かめ、引き戸に鍵掛けをする。あ、石垣がいる、気づいて再び引き戸を開けたが、キッチンもリビングも闇だった。そうか、肩が和らいで、トイレを通過し、書斎を覗くと、例の空疎な部屋だった。「いい夢だったな、いつでも死ぬ気でいる。これまで何もせず、これから先、すべきこともない」
風見はそう思念をまとめ、暗闇の中に入り、ベッドの上を四つん這いになった。